

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：33708

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03033

研究課題名(和文) インタビュー音声コーパスの構築と言語学習に対する動機づけの解明

研究課題名(英文) Development of Speech Corpus and Investigation into Language Learning Motivation

研究代表者

中山 麻美 (Nakayama, Asami)

岐阜医療科学大学・保健科学部・講師

研究者番号：00708125

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：短期留学に参加した日本人大学生の言語学習に対する動機づけの変化を長期的に研究しています。研究手法としてアンケートとインタビューを参加者に行った結果、留学前と留学帰国後直後では、英語に対する「不安」の減少が顕著にみられました。しかし、留学帰国後1年後においては、英語学習を中断している学生が多数存在しました。その反面、同じグループの参加者の中には言語学習を継続している学生もいました。違いは何故生じたのかを調べるためにインタビューを行った結果、言語学習を継続している学生は英語を使用して将来どうなりたいかを具体的にイメージしていることが分かりました。今後もこの結果を教育現場に還元したいと考えています。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は長期留学参加者が減少する一方、短期留学参加者が増加している社会的背景をうけて、短期留学でも長期学習意欲が継続する方法はないかを探ることを目的としている。アンケートでは言語学習意欲について参加者全体の変化の傾向をつかみ、インタビューではその変化がなぜ起こったのかを個別に調査した。特にインタビューでは、分析手法に話者の沈黙などの非言語情報を加え、客観的に心理的な変化を探ることを試みた。インタビューデータが膨大であるため、全てのデータを解析するにはまだ時間を要する。今後も研究を続け、言語学習における動機づけの持続・減少のメカニズムの解明に取り組みたいと考えている。

研究成果の概要(英文)：I have studied motivation for learning English on Japanese university students who joined a short-term study abroad (SA) for a long period. According to the findings of longitudinal research with questionnaires, there was a statistically significant reduction in learners' English anxiety comparing before the SA with just after the programme. However, one year after the SA, most of the participants lost their motivation for learning English and stopped studying English. On the other hand, some could maintain the motivation. To understand the difference among the participants, I conducted follow-up interviews with a few students. The results revealed that students who had concrete future self-image using English could sustain the motivation for learning English. I hope that I could reflect the findings on field of education.

研究分野：応用言語学

キーワード：動機づけ 短期留学 音声コーパス

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

2010年、「留学生30万人計画」が文部科学省主導によりスタートした。目的は、「グローバル戦略」の一環として、2020年を目途に30万人の優秀な留学生を受け入れ知的国際貢献を進めることである。また一方で日本人大学生が留学生を通して海外に目を向け、留学を促進する狙いもある。しかし2017年時点の経済協力開発機構の報告によると、日本人の短期留学生はわずかに増えているのに対し、長期留学生の数は減少している。そこで短い期間の留学でも長期に渡り言語学習の動機づけを継続させ、日本の国際競争力を支える言語能力の習得に効果があるのかを検証する必要があると考えた。

2. 研究の目的

大学生の「短期留学」に関する従来の研究では、短期留学前後での言語学習に対する「動機づけ」の性質的变化と、その長期的な「持続性」についてはまだ明らかになっていない。そこで本研究では時間の経過とともに言語学習に対する動機づけがどのように変化をするか、なぜ変化したのかを留学前後1年間にわたり追跡調査を行う。分析方法はアンケートの量的分析に加え、留学参加者へのインタビューデータを音声コーパス化し質的分析を行う。質的分析では録画されたインタビューに対して韻律情報(イントネーションやポーズの長さ)に加えて視線や頭部の動きなどの話し手の表現意図や感情に關与する非言語情報も研究対象として検証する。その研究結果から、短期留学経験が帰国後も長期的に学習意欲持続に繋がる教育的提言を行う。

3. 研究の方法

本研究では、短期留学に参加する日本人学生を対象とした留学前後における言語学習に対する動機づけについて、アンケートとインタビューによって調査を行う。平成29年度は、短期留学の参加者約40人を対象にアンケートを実施し統計的な分析を行い、その結果を基に6名の被験者を選出しインタビューを行う。留学帰国直後においても、同様のアンケートとインタビューを同一の被験者に実施する。平成30年以降も留学半年後・1年後データを上記と同じ方法で採取する。得られた結果に対して、アンケートの定量的統計解析、さらにインタビューデータを音声コーパス化し韻律情報 身体的非言語情報に対して分析を行う。以上により、短期留学が日本人大学生にもたらす言語学習に対する動機づけの長期的変化を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 量的分析結果(アンケート)

本研究では reading attitudes questionnaire (Yamashita 2007) and Motivational Factors Questionnaire (MFQ) (Ryan, 2009) の the Ideal L2 self を用いて、短期留学経験者の言語学習の動機づけの変化を観察した。また同時に英語の4技能の一つであるリーディングに対する態度や考え方の変化も検証した。調査を行った時期は短期留学参加4カ月前(Time1)、直前(Time2)、留学帰国後半年後(Time3)である。本来ならば留学1年後も追跡調査を行う予定であったが、研究代表者の勤務校変更に伴い被験者との連絡を取ることが困難になり実施できなかったため、

40名に対して短期留学帰国6カ月後までの3地点においてアンケートを実施した。(表1を参照)アンケートデータをANOVA検定した結果、Anxiety(不安)の数値が有意に減少した。(表2を参照)構造

表1 Descriptive statistics of the six variables at three times

Variable	Time	N	Mean	SD	SE	95% Confidence Interval for Mean	
						Lower	Upper
ANXIETY	Time 1	40	3.88	0.531	0.084	3.71	4.04
	Time 2	40	3.55	0.623	0.099	3.35	3.75
	Time 3	40	3.43	0.623	0.098	3.23	3.63
COMFORT	Time 1	40	3.01	0.313	0.050	2.91	3.11
	Time 2	40	3.01	0.339	0.054	2.90	3.12
	Time 3	40	3.09	0.372	0.059	2.97	3.21
IDEAL L2 SELF	Time 1	40	4.07	0.693	0.110	3.85	4.29
	Time 2	40	4.14	0.736	0.116	3.90	4.37
	Time 3	40	4.02	0.752	0.119	3.78	4.26
INTELLECTUAL	Time 1	40	4.07	0.525	0.083	3.90	4.23
	Time 2	40	3.83	0.698	0.110	3.61	4.05
	Time 3	40	4.09	0.562	0.089	3.91	4.26
LINGUISTIC	Time 1	40	4.25	0.603	0.095	4.06	4.44
	Time 2	40	4.07	0.673	0.106	3.86	4.29
	Time 3	40	4.23	0.541	0.086	4.05	4.40
PRACTICAL	Time 1	40	4.19	0.632	0.100	3.99	4.39
	Time 2	40	4.23	0.713	0.113	4.00	4.45
	Time 3	40	4.15	0.665	0.105	3.94	4.36

表2 Results of the ANOVA for the six variables

Variable	Source	df	SS	MS	F	p
ANXIETY	Between Groups	2	4.222	2.111	5.984	0.003
	Within Groups	117	41.273	0.353		
	Total	119	45.495			
COMFORT	Between Groups	2	0.16	0.08	0.682	0.507
	Within Groups	117	13.683	0.117		
	Total	119	13.843			
IDEAL L2 SELF	Between Groups	2	0.293	0.146	0.276	0.759
	Within Groups	117	61.915	0.529		
	Total	119	62.208			
INTELLECTUAL	Between Groups	2	1.609	0.804	2.237	0.111
	Within Groups	117	42.066	0.36		

	Total	119	43.675			
LINGUISTIC	Between Groups	2	0.724	0.362	0.979	0.379
	Within Groups	117	43.266	0.37		
	Total	119	43.99			
PRACTICAL	Between Groups	2	0.113	0.056	0.125	0.883
	Within Groups	117	52.669	0.45		
	Total	119	52.781			

さらにT検定による2地点での変化を観察した結果、Anxiety、Intellectual Value (知的価値) の Time 1 と Time 2 間と Time2 と Time3 間で有意な差が見られた。(図1と図2を参照) 他の要因である Comfort、Ideal L2 Self、Linguistic Value、Practical Value には有意な差が見られなかった。Anxiety が減少する結果は先行研究 (Yamashita, 2013) の結果と同様であるが、リーディングに対して Intellectual Value (知的価値) が減少し、留学後では増加に転じている。興味深い点であるが、短期留学の経験がどのように影響を与えたのかを更に調査する必要がある。

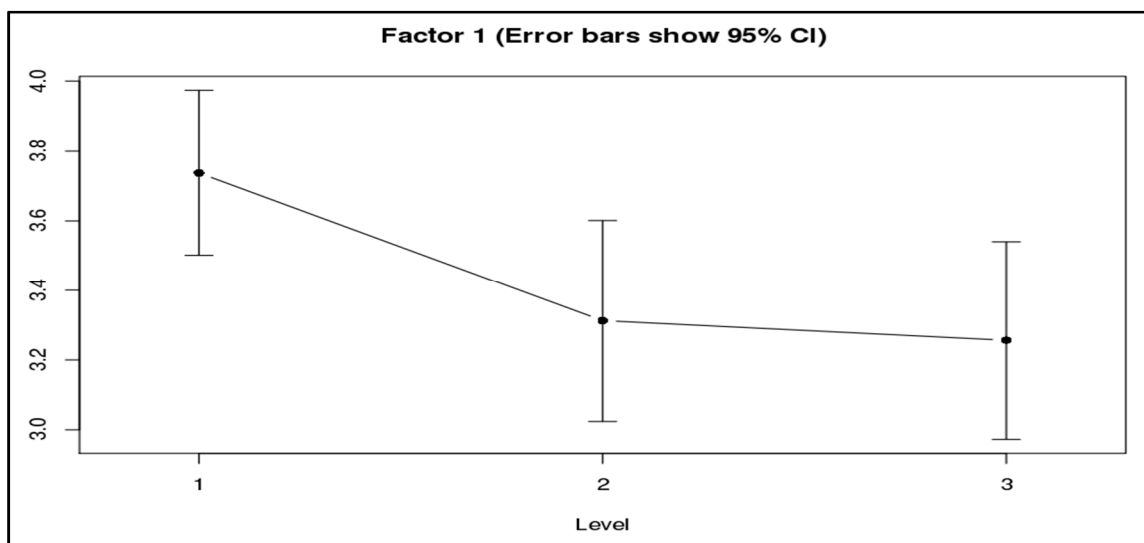


図1 「不安」要因の変化

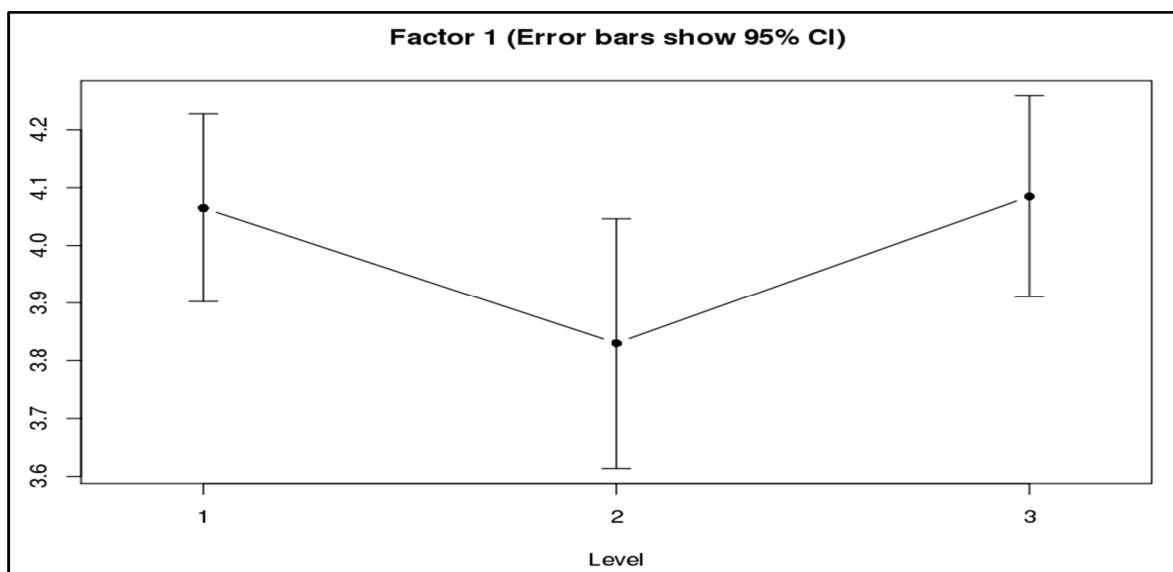


図2 「知的価値」要因の変化

(3) 質的分析結果 (インタビュー)

短期留学前のリーディングクラス内で行っていた英語の多読活動に対してのインタビューデータによると、内容にもよるが英語を読むスピードは上がったという意見が多数を占め、英語を読むことに対する自信に繋がり、「不安」が減少したのではないかと考える。しかし一方で、クラス内での一定の量を読むことを課題としたため、読まされていると感じた学生もいた。教員による多読活動の導入方法も学生の心理面での影響を考慮する必要がある。

短期留学後のインタビューデータでの質的分析を行った結果、「不安」の減少については、ホストファミリーや留学先の担当教員との意思疎通を通して、英語運用に対して自信を得たことが1つに挙げられる。しかし留学直後ではホストファミリーや現地の友達と SNS 等で交流する頻度が高かったが、1年経つと英語で自分の意見を書き込むことを躊躇する学生が多数いた。英語話者との直接的な言語接触が減少したことが要因であると考えられる。

しかし中には言語学習を継続している学生もあり、短期留学の経験を活かして長期留学を計画する学生もいた。彼らの特徴として、やはり英語を使って将来どうなりたいかというイメージを具体的に保持していたことが挙げられる。

(4) 音声コーパス構築

音声コーパスの構築であるが、研究協力者の Warwick 大学の Ema Ushioda 博士と協議を重ね、インタビューデータのコーディング作業は終了した。あとは具体的な音声箇所とテキストデータとの同期作業が残っている。今後も引き続き音声コーパスを完成させ、インタビューを通して沈黙・目線・ジェスチャー等の発話者の非言語情報で心理状態を探るツールとし、言語学習者の動機づけの解明に役立てたいと考えている。

(4) 参考文献

- Day, R. R., & Bamford, J. (1998). *Extensive reading in the second language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dörnyei, Z. (2009). The L2 motivational self system. In Z. Dörnyei, & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self* (pp. 9–42). Bristol: Multilingual Matters.
- Nuttall, C. (2005). *Teaching reading skills in a foreign language*. Oxford, UK: Macmillan Education.
- Ryan, S. M. (2009). Self and identity in L2 motivation in Japan: The ideal L2 self and Japanese learners of English. In Z. Dörnyei, & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self* (pp. 120–143). Bristol: Multilingual Matters.
- Takase, A. (2012). The impact of extensive reading on reluctant Japanese EFL learners. *The European Journal of Applied Linguistics and TEFL*, 1, 97–113.
- Yamashita, J. (2007). The relationship of reading attitudes between L1 and L2: An investigation of adult EFL learners in Japan. *TESOL Quarterly*, 41, 81–105.
- Yamashita, J. (2013). Effects of extensive reading on reading attitudes in a foreign language. *Reading in a Foreign Language*, 25(2), 248–263.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Asami Nakayama and Paul Dickinson	4. 巻 第12号
2. 論文標題 Motivational Changes Through Extensive Reading	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 名城大学教育年報	6. 最初と最後の頁 19-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Asami Nakayama & Paul Dickinson	4. 巻 第12号
2. 論文標題 Motivational Changes Through Extensive Reading	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 名城大学教育年報	6. 最初と最後の頁 19-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Paul Dickinson and Asami Nakayama
2. 発表標題 Exporing the Effects of ER on L2 Reading Attitudes and Motivation
3. 学会等名 British Association for Applied Linguistics
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Asami Nakayama
2. 発表標題 Motivational Changes through Short-Term Study Abroad Experience: An Exploratory Study Utilising Positioning Theory
3. 学会等名 ALAK International Conference Applied Linguistics Association of Korea (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ウシオダ エマ (Ushioda Ema)	ウォーリック大学・Centre for Applied Linguistics・ Professor	